

# 焼け跡に見た夢

## 菅原文太 虚と実の軌跡



三山 喬

一九八〇年放映の『獅子の時代』は、NHK大河ドラマ史上、例を見ない異色作だった。主人公ふたりに歴史上のモデルはなく、ストーリーは脚本家・山田太一が書き下ろしたまったくのオリジナル。幕末から明治初期、激動の時代の明暗を、薩摩藩出身の新政府官僚と会津藩士から自由民権運動家に転身したふたりの人生を交差させ、描き切った。

オープニングの舞台は、一八六七年のパリ万博。ここに日本から江戸幕府と薩摩藩それぞれが参加して正統性を主張し合い、双方の派遣団にいた両主人公は、そのせめぎ合いのなかでお互いを知る。西欧の街並み

と和装の武士たちのミスマッチ、そこに現代のパリ市街の風景まで挿入した映像表現も実験的だった。

### 俳優からプロデューサーへ

文太はこの大河でダブル主演のかたわれ、会津藩出身の平沼銑次役を務め、ヤクザスターから国民的俳優への脱皮に成功する。しかしその一方、文太はこの作品を経て、二年後から映画出演の本数を極端に減らすようになる。

とくに主演作品にそれは著しく、八一年の『炎のごとく』（監督・加藤泰）に出たあとは、九〇年の『鉄拳』

（監督・阪本順治）と九四年の『やくざ道入門』（監督・山城新伍）、そして二〇〇三年の『わたしのグランパ』（監督・東陽二）の三本を撮っただけだ。

あれほどのビッグスターとして人々に認知されながら、改めて振り返ると、毎年五本も六本も主演作に出て、銀幕でフル活動したそのピークは、三十年代後半から四十年代末までの十余年に留まるのだ。

この変化は大河出演後に東映から独立し、やがて個人事務所を立ち上げて、マイペースで働けるようになったためだったが、たとえばこの当時、新興勢力の角川が薬師丸ひろ子や原田知世など、作品ごとに若手女優を押し立てる手法をとり、映画界全体が『アイドル主導期』になったことも、文太のようなタイプが活躍しづらくなる一因となった。

東映から鶴田浩二や高倉健が抜け、その屋台骨をひとりで担うようになった七〇年代後半には、文太自身『脱ヤクザ映画』を模索した時期もある。たとえば『ロッキー』や『がんばれベアーズ』などスポーツものの洋画ヒットを参考に、寺山修司を監督に招いた『ボクサー』や『ダイナマイトどんどん』（監督・岡本喜八）という野球の映画を撮ってみたり、人気歌手の沢

田研二と組み『太陽を盗んだ男』（監督・長谷川和彦）というサスペンス映画にチャレンジしてみたり、試行錯誤を重ねた時期もある。

しかし、同じころの高倉が『八甲田山』『幸福の黄色いハンカチ』『野生の証明』などで再ブレイク、脱ヤクザスターのイメチェンに先んじたのに比べると、文太の時代対応は出遅れてしまった。

ビッグスターとなり高額の出演料を約束され、東映時代に控えていたテレビCMにも出るようになったこと、そういった理由から出演作を選ぶ余裕ができたことも影響した。

そんな状況から八〇年代の文太は、俳優としてのキャリアアップを目指すより、映画作品そのものを創り上げるプロデューサー業を志向するようになっていった。もともと『芸能人』として脚光を浴びるより、作品性を追うクリエイター志向だったため、ある意味では自然な流れでもあっただろう。

そして、このときに掲げた具体的な目標こそ、大河出演のあと、仙台一高後輩の小説家・井上ひさしから直談判で許諾を得た『吉里吉里人』の映画化であった。文太は数年をかけ、何人もの脚本家にシナリオを書か